

生きて還る

完全試合投手となった特攻帰還兵 武智文雄

集英社インターナショナル

生きて還る

完全試合投手となった特攻帰還兵 武智文雄

序章

零戦で還つて来た男

燃え上がる零戦

十八歳の夏。

《桜花》と名付けられた特殊な飛行機で、爆弾もろとも敵艦に体当たりする任務を担っていた特攻隊員・田中文雄は、その日、滋賀県大津の部隊にいた。

ポツダム宣言受諾を天皇陛下自らが伝える《玉音放送》を、全員起立して聞いた。

「朕深く世界ノ大勢ト帝國ノ現状トニ鑑ミ非常ノ措置ヲ以テ時局ヲ收拾セムト欲シ茲ニ忠良ナル爾臣民ニ告ク

朕ハ帝國政府ヲシテ米英支蘇四國ニ對シ其ノ共同宣言ヲ受諾スル旨通告セシメタリ

……」

難解な言葉だったが、敗戦を意味するものだと誰もが理解した。兵士の中には膝から崩れ、地に伏して嗚咽する者もいた。

（オレの命は、どこまで弄ばれるのか）

死なずに生き延びたことが、真っ直ぐな青年の心根をいつそう締めつけた。

(お国のために、死ねなかつた……)

文雄は、死を覚悟せざるを得ない運命にもがき苦しみ、死ぬことに誇りを見出そうとしながらその死さえも果たせなかつた、自分の身の上を、心の中で整理することができなかつた。

復員が許された日。

十八歳の青年・田中文雄は、一機の零戦(通称ゼロ戦)に飛び乗った。

エンジンをかけ、慣れた手順で機体を前方に動かす。

爆音が琵琶湖の空に轟く。

滑走路を疾走し、零戦は機体を空に浮かせた。

「ゼロ戦一機、かつぱらってやるわ！」

文雄は、零戦で上昇を続けた。

ときおり白い雲が機体をすり抜ける。

琵琶湖の空を旋回すると、湖に沿って北東へ向かった。

訓練の記憶が次々と脳裏をかすめた。

桜花特攻作戦が終了する六月まで、文雄は茨城・神之池にいた。大空から、エンジンもない飛行機で真つ逆さまに落ちる訓練を強いられた。青年にとって飛行機は、いつしか、安全に空を飛ぶのでなく、命を落とすため空から落ちる乗り物に変わっていた。

(このままどこに突っ込もうか)

物騒な思いが頭をよぎる。

死んで行った仲間を思えば、おめおめと生きては帰れない。

(どうせ生きていても、希望はない)

どこに突っ込めば本懐ほんかいを遂げられるのか。

答えは見つからなかった。

琵琶湖を離れ、東へ針路を向けた。

揖斐川いび、長良川、そして木曾川が眼下に見えてきた。

懐かしい故郷の風景。

各務原かかみがはらの上空を旋回し、田中文雄の帰還いちごうを故郷の大地に報せてから、木曾川の河原の一隅いちごうを目指し、高度を下げた。

生きて還れるとは思っていなかった。

ここに還りたいわけでもない。

だが、還る家は、母の待つ故郷以外に思いつかなかった。

(家に還ろう)

河原に降り、エンジンを切ると、一度空を見上げた。

感傷はなかった。

死の訓練を重ねて失われた感情は、すぐに戻らない。

特攻服のまま、狭い操縦席から身体を持ち上げ、草原に降りた。

残っているガソリンを機体にぶちまけ、火を点けた。

ボワツと、零戦が真っ赤な炎に包まれた。

燃え上がる零戦を一瞥いちべつした後、踵かかとを返し、文雄は草原を家に向かって歩き始めた。

ときおり、小さな爆発音が聞こえた。

文雄は二度と振り返らなかった。

だが、前方に《希望の未来》が見えているわけでもなかった。

背中で零戦が大きな炎に包まれていた。

目次

序章 零戦で還つて来た男 9

燃え上がる零戦

第一章 野球との出会いと決別 19

野球への思い／頑固な父に負けない智恵／夏の甲子園大会中止／
野球以外の「生きる道」

第二章 桜花特攻隊 47

愚か者が乗る飛行機／死の海に怯える日々

第三章 愚連隊 69

ケンカに明け暮れる／運命の糸／第二の生命が誕生

第四章 自由を許す 93

近鉄の契約選手第一号／変則投手はふたりいらぬ／
自由を取り戻す旅／この女性と所帯を持ちたい

第五章 完全試合 129

新婚一年目のジंकウス／史上二人目の快拳／早く家に還りたい

第六章 幻の完全試合 159

生まれたときから親不孝

第七章 近鉄消滅の危機 169

永田ラッパの嵐が直撃／絶対に生き残ろう！

終章 文雄の還る家 189

野球からビジネスへの転進／成し遂げられなかった感／
野球をやりたいという気持ち

あとがき 218

注 田中文雄は一九五四年（昭和二十九年）に結婚し、武智姓となった。本書では戸籍に従い、それ以前はすべて田中文雄と表記し、結婚後を武智文雄で統一する。引用した記事中の表記は原則として記事のとおりだが、混乱がないよう、一部修正したことをご了承ください。また、チーム名のパールズは、パールズとも表記されるが、本書では、日本野球機構の表記にならない、パールズとする。

第一章

野球との出会いと決別

野球への思い

「ふみおがバッターだぞ、みんな下がれ、ずっとバック！」
年上の子どもが叫ぶ。

内野を守っていた上級生たちが、背中を向けて下がって行く。

「打たせないぞ！」

身体のでかい投手がムキになってゴムボールを投げ込んでくる。

文雄は、これを楽し々と打ち返した。

竹筒のバットから弾き出された大飛球が、空高く舞い上がる。下がっていた相手の頭をさらに越えて白球が飛んで行く。

胸の奥が沸き立つ。

一塁に走る、一塁を蹴って、三塁へ、そしてホームベースへと還った。

飛ぶように走る、このワクワクする気持ちだが、文雄は好きでたまらなかった。

「やったあ、ホームランだ！」

仲間たちが叫ぶ。

文雄の表情が輝く。

(何だろう……)

この心地良さは、言葉に表しようがない。

自分に与えられた、特別な力。

(幸せだなあ)

幸せという感覚が、どういものかまだわからなかった。才能の意味も知らない。ただ、上級生も、仲間たちも打てない大きな打球を文雄だけが打てるのは確かだった。

(野球って面白い。もっと野球がやりたい！)

文雄の心の中で、野球への思いが大きくふくらんでいった。

田中文雄は、一九二六年(大正十五年)十一月四日、岐阜県稲葉郡前宮村前渡まえみやむらまえどに生まれた。
た。

兄二人、姉三人に続く六人目。文雄の後に、弟三人が生まれているから、九人兄弟の六番目になる。

父は農業のかたわら、村議も務めた与一。母はぎん。

大正の年号は、文雄が生まれた翌月、昭和に変わる。

十二月二十五日に大正天皇が崩御し、昭和と改元したからだ。
その年の世界の出来事をたどると、

ルフトハンザ航空設立

ダイムラー・ベンツ社設立

ボルボ社設立

豊田佐吉が豊田自動織機製作所を設立

など、交通機関の発達と変化を感じさせる会社の誕生が目を見く。

また同時に、

ジョン・ロジャー・ベアード（スコットランド）がテレビジョン送受信の公開実験に成功

日本放送協会設立

NBCがラジオ・ネットワーク放送開始

高柳健次郎が電子式テレビ受像器（ブラウン管式）を開発

ラジオ放送の始まりとテレビの開発・実用化が精力的に行われていた時代の躍動を感じさせる。

音楽界ではルイ・アームストロングが活躍し、文学界ではアガサ・クリステイが『アクロイド殺人事件』を発表する一方で失踪事件も起こしている。川端康成が『伊豆の踊子』を、アーネスト・ヘミングウェイが『日はまた昇る』を発表したのもこの年だ。

政治的には加藤高明^{たかあき}内閣が加藤の死去によって総辞職し、第一次若槻禮次郎^{わかつきれいじろう}内閣が発足した。前後の主な歴史を列記すれば、

一九二三年（大正十二年）、関東大震災

一九二七年（昭和二年）、昭和金融恐慌

一九二九年、世界恐慌

一九三一年、満州事変

社会は不穏な空気を内包し、少しずつ戦争の足音が聞こえ始める、決して人心も人々の暮らしも安定していなかったわけではなさそうだった。

そんな時代に、田中文雄は生まれ、育った。

子どもはまだ、世間の不穏な空気をそれほどはつきり自覚してはいなかった。貧しさは当たり前、日の出とともに目を覚まし、日暮れとともに自宅に戻る。学校から帰れば、家の手伝いはしたが、それ以外の時間は近所の友達と野山を駆け、泥んこになって遊ぶ。元気潑刺はっらっの毎日だった。

文雄は幼いころから近くの川や野山で自然と戯れ、たくましく育った。「木曾川の河童」とあだ名がつくほど、泳ぎも得意だった。

遊びの中でも、文雄がひとときわ心を躍らせ、熱中したのは草野球だった。兄たちの遊びに入れてもらって始めたのがきっかけだ。稲刈りが終わった田んぼや草原で、ゴムボールを使って三角ベースの草野球をやった。バットは、竹林から拾ってきた竹筒だった。

兄たちがやるのを見て真似て、打ち、投げ、捕るうちに、文雄は野球が好きでたまらな

くなった。身体はまだ小さいが、ポーンと、守る相手の頭をボールが越えて行く気持ちよさは、何とも言えなかった。

小学校の上級生になると、学校の野球チームに入った。

文雄は投手になった。

誰よりも球が速かったからだ。

投手になると、打者としてボールを遠くに飛ばすのとまた違う、新しい野球の魅力に引き寄せられた。

文雄の投げたボールが、パシーンと、快音を響かせて捕手のミットに吸い込まれる。その瞬間の、心地良さ。打者のバットが空を切り、文雄のボールを捉えることができない。

身体じゅうがぞくぞくする。その快感。

(誰もぼくのボールを打つことができない)

誇らしかった。それ以上に、他の誰にもできるわけではない、特別な力が自分に与えられている、その喜びが文雄に勇気を与えた。

「松井の後を継ぐのは絶対、ふみちちゃんだ！」

野球部のチームメイトが言った。

「おうそうだ、ふみちゃんも岐商ぎしやうに行つて、甲子園で優勝してよ」
別の仲間も声を上げた。

松井まついというのは、岐阜商を夏の甲子園に導き、初出場初優勝を成し遂げたエース投手・松井榮造えいぞうのことだ。センバツでも二度の優勝を岐阜商にもたらした松井はそのころ、岐阜の英雄とも言える存在で、野球ファンならずとも知らない人はいないほどの人気者だった。岐阜商が全国優勝を果たすと、岐阜市内でパレードが行われた。市内から離れた山村に住む文雄たちは見に行けなかったが、パレードの噂、華やかさは自然と耳に入ってきた。野球少年にとって松井榮造は特別な憧れ。

(ぼくも、岐阜商に行つて、思い切り野球がしたい)
文雄が、そう夢を描くのもごく自然な成り行きだった。

そのころの岐阜市立商業学校(現在の県立岐阜商業高校)は、破竹の勢いだった。県内で圧倒的な強さを誇っていたばかりでなく、全国的にも強豪校としての名声を年ごとに高めていた。

一九三二年(昭和七年)の第九回全国選抜中等学校野球大会に出場して以来、一九四一年まで十回連続してセンバツに出場。一九三三年には初優勝した。一九三五年、一九四〇

年にも優勝を飾り、岐阜商の名は全国に轟いた。

夏の甲子園には一九三六年に初出場し初優勝を飾っている。その時のエースが前述の松井栄造である。そして、一九三八年にも全国準優勝を遂げた。

文雄が中等学校に入る一九四一年は春のセンバツに出場。準決勝で愛知県立一宮中に十対二で敗れたものの、全国ベスト四の一角に入った。

頑固な父に負けない智恵

前宮尋常小学校を卒業し、前宮小の高等科に二年通い、八年間の勉強を終えるとき、文雄は次の進路を選ぶ分岐点に立たされた。

文雄の希望ははっきりしている。

「岐阜商に行つて、野球をやりたい」

まず、母親に希望を伝えた。

「行けたらいいね。応援するよ」

母は文雄に賛成してくれた。だが、野球にまったく興味が無い父親の気持ちもまた、揺るぎなかった。

「父さん、岐阜商に行つて、野球をやりたい」
勇気を奮つて、父親に思いを伝えた。

「ダメだ。お前は兵隊になれ」

父は即座に文雄の希望をはねつけた。

農業で家族の生計を支えているかたわら、村議も務める父・与一は、頑がんとして野球を認めしてくれなかつた。

日本はまだ大日本帝国憲法の時代。家長は父親であり、父は絶対的な存在だつた。たとえ母親が理解してくれても、母親が父親を説得して、子ども達の希望を叶えてくれるような世相ではなかつた。

父親が首を縦に振らない限り、野球はできない。

文雄は悩んだ。

反対を押し切つて、岐阜商に進学はできない。父親を説得することも不可能だ。

(野球は、あきらめるしかないのか)

一方で、岐阜商の野球部から、文雄は熱心に誘われていた。

「岐阜商に来て、野球をやらなにか」

願つてもない申し出。小学校の大会で活躍する文雄のピッチングやバッティングが、岐

卓商野球部関係者の目に留まったのだ。

文雄には断る理由はない。

「やりたい。ぜひ岐卓商に行つて、野球がやりたい」
思ひは募るばかり。

小学校時代は、大会である程度勝ち進みはするが、最後は市内の学校に苦杯を喫し、一度も優勝できなかった。文雄は投手、そして強打者として打線の中心でもあった。

(強いチームに入つて、全国の舞台で力を試したい)

甲子園球場への憧れが胸の奥でふくらんだ。

折りを見て、もう一度、父親におずおずと尋ねた。

「岐卓商から誘われた。どうしても野球が」

言いかけた途端、もう、父の強い言葉が返ってきた。

「兵隊になれ」

その一点張りだった。

文雄の望みは完全に断たれた。

やむなく、父の決めたとおり、陸軍飛行学校を受験した。

一次試験に合格、あとは二次試験を残すばかりとなった。
合格すれば、野球の道は断たれる。

(甲子園には出られない)

胸をかきむしるほどの辛さが文雄を攻め立てた。

(英雄・松井栄造投手の後を追いかけて、自分も甲子園で優勝する)

すべての望みが、父親の反対で粉々に砕け散るなど、我慢できなかつた。だが、それが
当時の子どもの宿命だった。父親の決断には逆らえない。

二次試験の日が来た。

父親の鋭い視線を背中に感じて、文雄は自宅を後にした。

(野球をやりたい！)

強い思いを胸に秘め、文雄は試験会場に向かった。

数日後、陸軍飛行学校の合否の結果が届いた。

開封した父親の顔色が変わった。

「文雄を呼べ！」

妻のぎんに怒鳴った。

母に呼ばれて、文雄が父親の前に座った。

「なんだ、この結果は」

父が鋭く言った。

文雄は頭を垂れた。

「情けない。田中家の恥だ」

文雄は、何も言わず、ただ頭を下げ続けた。

通り過ぎる嵐をジッと待つ……。

(いまは親父の怒りを何も言わず受けとめる)

傍らで、母が文雄にやわらかな眼差しを向けていた。

(この子は、芯の強い子やよ)

利発な子だ、試験に落ちるはずがない。これには何か訳がある。文雄は、頑固な父親に負けない智恵と勇気を持った子だ。我が子ながら、天晴あっぱれだと思った。

おずおずと父の前から引き下がり、お勝手に逃げるように姿を隠すと、文雄は思わず両手を挙げ、満面の笑みを浮かべた。

(やった、これで野球ができる！)

その笑顔を、母は微笑ほほえんで見つめた。

試験の結果は、文雄には見る前からわかっていて。

一体、どんなからくりがあつたのか。そのことは、後に京都新聞の取材に応えて、文雄自身が語っている。

以下は、二〇〇一年（平成十三年）八月十二日に『戦争のない世紀へ 戦後56年 幻の甲子園』と題して掲載された新聞記事の一部だ。

『岐阜県の農村に生まれ、小学校時代から野球の投手として活躍した。村議だった父は「兵隊になれ」と繰り返し、小学校高等科を卒業後、陸軍飛行学校を受験した。しかし、当時、甲子園の常連だった市立岐阜商（当時）からも誘いがあり、武智さん（筆者注・当時の姓は田中）は悩んだ。

「やっぱり野球をしたくて、陸軍の二次試験を白紙で出した」。数日後、家に騎馬の憲兵がやってきて、武智さんを問いただした。事情を説明すると、憲兵は納得して帰ったが「息苦しい時代になってきた」と子ども心に感じたという。』

二次試験の答案を全部、白紙で出した。

受験して落ちたのでは、父には文句が言えない。

こうして、一九四一年（昭和十六年）四月、晴れて田中文雄は岐阜商に入学し、野球部

の一員になった。

文雄は時に大胆な行動に出る。この時もまた、その大胆さによって、野球への道を開いた。

夏の甲子園大会中止

名門・岐阜商の練習は、戦前の多くの強豪校がそうだったように、徹底した走り込みや猛ノックが課され、鉄拳制裁も当たり前前の厳しさだった。

十二歳後輩になるが、兄の後を追って岐阜商の野球部に入り活躍した末弟の田中和男（現在は名古屋市在住）が、苦笑しながら、当時の練習の様子を話してくれた。

「いまなら出場停止になるような鉄拳制裁や愛のムチが毎日、当たり前でした（苦笑）。昔はどこもそうだったでしょう。

練習はとにかく厳しかったです。冬の間は、長良川の堤防を毎日ずっと走るばかり。ボールは持たせてもらえません。そりやもう、厳しかったですわ。

先輩には毎日説教されて殴られる。あまりに理不尽で厳しいので、同期の仲間七人全員で、『もうやめます』と監督に言ったことがありました。そしたら監督はたったひと言、

『いいよ、やめても』

それ聞いたらもう返す言葉もなく、みんな覚悟を決めたというか、あきらめて、野球部に戻りました。二年生の時は私ら弱かったです。三年になってなんとか強くなったんですけど」

この証言は、戦後の昭和三十年ころを振り返った話だ。文雄が入学したのはその十四年前。伝統的な厳しさは弟・和男の時代以上だったと想像していいだろう。

当時の広江嘉吉監督は、とくに厳しい指導で有名だった。

弟・和男から聞いて驚いた。そのころ、岐阜商には野球部専用のグラウンドがなかったという。岐阜市が「第二グラウンド」という施設を整備してくれることになり、「毎朝、早く行つては石拾いをしました」と和男が教えてくれた。全国制覇を重ねる強豪校だが、野球をする環境は必ずしも整っていなかった。それだけに、普段の練習は、走る、鍛える、そして殴られる。理不尽は当たり前だった。だが、岐阜商野球部の厳しい練習に耐え、やり抜けば、その先に甲子園の舞台があり、全国制覇の夢も現実に狙える。はつきりした希望があったから、乗り越えることができた。

厳しさは練習ばかりではなかった。文雄が住む稲葉郡前宮村前渡から岐阜市内にある岐

阜商までの通学は片道二時間、往復四時間という難儀があつた。

朝五時半には家を出る。自宅から最寄りの各務原線新那珂^な駅までは自転車、砂利道をガタガタ走って四十分かかる。そこから電車で新岐阜駅まで三十分。市電でまた三十分。さらに徒歩二十分、ようやく校門にたどり着く。

夜、練習を終えて自宅に戻るのには、夏場になれば深夜十一時近くなることもしばしばだつた。

大変ではあつたが、野球への思いが通学の苦勞を上回っていた。文雄は在学中、無遅刻無欠席で登校し続けた。大変なのは文雄だけではない。朝五時半に間に合うよう、母はさらに早起きをして、弁当を作り続けてくれた。

二年生になると、文雄は主力に抜擢され、試合に出場する機会が多くなった。広江監督に素質と実力を認められたのだ。

ここまでは、前途の希望に満ちた、恵まれた青春の日々と言つていいだろう。苦しさもあるが、夢がある。厳しさを越えた向こうに、光り輝く舞台が見える。だから、元気に立ち向かえた。

最初で最大の試練は、中等学校に入学してまもなく文雄の身に降りかかっていた。

戦争に向かう世相が、文雄の前に立ちほだかったのだ。

すでに始まっていた日中戦争がさらに激化し、アメリカとの対立を深める日本は、太平洋戦争へと突き進んでいた。

一九三九年（昭和十四年）九月、ナチス・ドイツ軍がポーランドに侵攻し、ヨーロッパで第二次世界大戦が勃発。

一九四〇年九月、日独伊三国同盟が成立。

一九四一年、様々な形で日米交渉が行われるが、根本的な合意に至らず、日米双方が開戦への準備を始めていく。

日本は七月から四度の御前会議を重ねた。日米交渉が決裂した結果を受けて、十二月一日、開戦を最終決定した。そして十二月八日、真珠湾攻撃によって太平洋戦争が始まる。

一九四一年七月、二十七回目の夏の甲子園大会予選は、各地で始まっていた。その途中で突然、中止が発表された。

岐阜商ナインも、甲子園に向けて懸命の調整と練習を重ねていた。

そんなある日、グラウンドはいつもの厳しさとはまた別の、異様な空気に覆われた。

「夏の甲子園大会が中止になった」

監督が、怖い顔で言った。

「中止って？ どうしてですか！」

「知らん」

監督はそれだけ言うと、グラウンドから出て行った。

岐阜商ナインは、目の前の橋を壊され、大河を前に呆然と立ち尽くした顔でグラウンドに座り込んだ。前途の光が突然消えて未来が真っ暗になった。

「戦争の影響か？」

「日本じゃまだ、戦争はやってない」

「野球、できるだろ、なんで中止なんだ！」

球児たちが、口々に叫んだ。納得がいかない。日中戦争の激化は新聞や大人たちの会話で知らされている。だが、身近に戦争の砲火はない。日々の生活は貧しいとはいえ、これまでと変わりが無い。

「なぜ野球が犠牲になるんだ！」

それが、球児たちの正直な気持ちと戸惑い、そして憤りいきどおだった。

漠然と、戦火の拡大のためと理解されたが、実際のところ、明確な中止の理由は説明さ

れなかった。人々は、これまで普通に行われていたことが突然中止になるといった特別な出来事によって、日本が刻々と開戦に向かっている現実を実感させられた。

文雄もまた、中止に納得のいかないひとりだった。

「今年が中止なら、来年もやれないだろ？」

同級生の間で交わされた会話はそれだった。

自分たち一年生には、この夏の中止はそれほど影響はない。いずれにせよ、まだ試合に出る機会はなかったからだ。

「アメリカとの戦争が始まったら、来年だって大会はできないだろう」

「戦争になったら、野球どころじゃないさ」

あつてはならない、^ク未来喪失^クという現実。それを覚悟せざるをえない空気が日本中を覆い始めていた。

十二月八日、日本が真珠湾攻撃を仕掛け、アメリカとの全面戦争に突入したのは、夏の甲子園大会が中止になった後のことだ。

球児たちが案じたとおり、戦争が始まった翌夏四二年も四三年も、夏の大会は開かれなかった。春のセンバツ大会も、一九四二年から中断となった。

野球以外の「生きる道」

文雄が中等学校に通っていたころの友人に話を聞くことができた。

岐阜新聞の社長、会長を経て、いまも地元で活躍している、岐阜新聞の杉山幹夫名誉会長だ。取材の時点で八十九歳、当時の野球界の状況も鮮明にそして詳細に記憶されていた。「ふみちゃんは年齢ではひとつ上、学年は私がひとつ上だったと思います。あの頃、有望な野球選手を強豪校に入れる場合、岐阜商あたりは小学校を卒業してすぐに入学させなかった。高等科に二年行かせて、成長させてから岐阜商に入れる。その方が、二年先までプレーできるからです。ふみちゃんもそうだったと私は思っていました。」

向こうは岐阜商、私は岐阜中学。学校は違いましたが、通学途中の新岐阜駅、いまの名鉄岐阜駅でいつも一緒になるんです。ふみちゃんが各務原から一緒に乗ってくる小学校時代の同級生が、岐阜中で私と同期でした。その友人を通して知り合いになりました。

彼は二枚目でいい男だった。女学生たちにモテモテでした。

いまの時代なら、タレントにもなれたでしょう。野球界だけでなく、芸能界でも通用したと思います」

杉山幹夫もまた、岐阜中の野球部で白球を追う、熱烈な野球少年だった。

「野球が大好きでした。テレビもまだない時代でしたが、何に刺激を受けたのか？ やはり、野球の楽しさ、面白さでしょうねえ。カーンというバットの快音、白球を追いかけ興奮……。」

私たちの時代は、戦争の影響で、だんだん野球ができなくなった。私が三年生になった昭和十七年には、野球部という名前はダメ、野球班という名前になりました。班というのは軍隊の言葉ですね。

私の中等学校野球は、昭和十七年で終わりました。

十八年には、対外試合が原則禁止になり、岐阜中は野球班が廃止になりました。岐阜商はおそらく、目立たないように練習していたと思います」

野球ができなくなってから、新岐阜駅での会話も、湿りがちだったという。

「勉強ばかりで、面白くないなあ。野球をやりたいたいなあ、そんな話をしていました。ふみちゃんは、キャッチャーミットに自分の投げた球がポーンと収まる、あの快感が忘れられないようでした」

明治神宮体育大会は第二次世界大戦突入後の第十三回大会（一九四二年）から厚生省主

催となり、明治神宮国民練成大会と名前も改められ、一九四三年（昭和十八年）まで続けられた。岐阜商は、東海地区大会の決勝まで勝ち進んだ。文雄が試合で活躍したのは、その大会が事実上、最初で最後だった。無念にも決勝戦で敗れ、全国の舞台に立つ道は断たれた。それが、文雄にとって最後の中等学校野球となった。

（野球は、終わりだ）

文雄は観念した。

負けて、涙も出なかった。

（もう野球はできないだろう）

「野球部、これからも練習できるかなあ」

同級生がつぶやいた。

文雄は、

「練習したって、大会は……」

大会はもうないだろう、と言いかけて、もつと深刻な事実に思いが至った。

（大会どころではない。野球がもうできなくなる……）

その敗北は、野球との決別を意味していると文雄は理解した。そう思ったら、何もかも、

する気が失せてしまった。喪失感で全身の力が抜けた。

(野球ができないのに、朝五時半に起きて学校に通う意味があるのか)
父の顔が浮かんだ。

「男なら、お国のために奉公しろ。野球なんて、もつてのほかだ！」
中等学校に入る前から、父親に繰り返して叱責されていた。父の言葉が脳裏を駆けめぐる。
「ふみちゃんは、これからどうする？」

聞かれて、文雄の頭に浮かび上がったのは、映画のシーンだった。

少し前、映画館に《予科練》の映画を見に行った。

飛行機を颯爽と操る航空隊員の姿が華やかで、

(飛行機乗りになりたい)

文雄は憧れを抱いた。

それまで、野球以外に熱く胸を焦がす対象はなかった。

初めて見つけた、野球以外の「生きる道」だった。

(このまま岐阜商に通っても意味がない)

野球の夢が奪われた。日々の厳しい練習の先にあるはずの希望が、幻のように消え去った。

五月末には、秘匿ひとくされていた山本五十六連合艦隊司令長官の戦死が発表され、アッツ島の全滅も玉碎ぎょくさいという言葉で新聞等で報道された。日々の暮らしが戦争一色に染まる中で、「野球に現うつを抜かす」ことが少年にとつても居心地の悪い行為になっていた。

(日本が勝つまで、もう野球はできない)

勝つしかない、勝てばまた、野球ができる。

文雄はそう考えた。

(それならば、戦場で華になる。男の本懐を遂げてやる)

文雄は、心を決めた。

(これで親父も文句ないだろう)

文雄は、野球への思いを断ち切り、予科練を志願した。

大空への憧れ。

それが本当に素直なときめきであったのか、十代の青年なりに、自分の闘志を鼓舞こぶできる場所を探した末の、半ば自分への強制だったのかは、文雄自身にもわからない。

人は得てして、見えない恣意しに動かされ、自分を納得させる方向に気持ちを向けようとするものだ。

当時の日本には、十六歳の若者にそのような決断を促す大きな力が渦巻うずまいていた。

当時を生きた十代の若者として、また「大事な友人たち」を戦地に送った仲間として、杉山幹夫が語ってくれた。

「あのころ野球なんかやったら『国賊』^{こくぞく}のように思われた。ふみちゃんも甲種飛行予科練習生、通称予科練に行くわけですが、マスコミが嘵^{はや}し立てましたからねえ。予科練に行け、飛行機乗りになれ、と。海軍に行くのが美談のように。だから、正義感が強くて純粹だったふみちゃんは、本気で『お国のために』と決意したのでしよう。

『特攻攻撃をやって、日本が勝てば、また野球ができる！ その礎^{いしずえ}になろう……』
ふみちゃんは、次の世代が野球をやれるなら、喜んで捨て石になる、きつとそういう気持ちだったと思います。

この国でまた野球ができる日が来るように。そのために、命をかけても悔いはない。それがふみちゃんの思いだった……」

戦況が厳しくなり、近親者の戦死が次々と伝えられるたび、杉山は、駅で会えなくなつた田中文雄を思い出し、無事を祈つた。しかし、生きて還ってくる姿を想像するのは難しかった。

一縷^{いちろ}の望みを抱きながら、杉山は思った。

(一度でいいから、ふみちゃんの球を打つてみたかった)

野球の神様がいるならば、文雄は野球の神様に愛されていたのだろうか。この時までの野球人生を見る限り、野球の神様にはそっぽを向かれていた。とても文雄に微笑みを注いでいたようには思えない。

あるいは、究極の試練を与え、恵まれた文雄の才気を育むために、厳しい修練の期間を与えたのだろうか……。

文雄が予科練に志願し、故郷・前渡を後にしたのは、一九四三年（昭和十八年）十月。十六歳の秋だった。

生きて還る
小林信也・著

発行：集英社インターナショナル（発売 集英社）

定価：1,600円（本体）＋税

発売日：2017年10月5日

ISBN：978-4-7976-7344-9 C0095

ウェブでのご予約・ご注文は [こちらにどうぞ！](#)